

特集6

アーバンデザインの課題

海外における

アーバンデザイン

長島考一〈楨総合計画事務所・横浜国大講師〉

1——アーバンデザインと市民社会

このテーマをいただいた時、いったいどういう視点からこのテーマを扱ったらよいか、ちょっと考えさせられた。筆者は博学強記のいわゆる百科全書派的な学究ではなく、物的環境を造っていくことに生きがいを感じるアーバンデザイナーである。そのような意味で筆者自身とアーバンデザインとのかかわり合いを通して、海外のアーバンデザインを考えていきたいと思う。

(1) ある個人的体験

1957年、筆者がまだ建築科の三年生のときのこと、ある機会を得て主にヨーロッパを一年半ほど放浪したことがある。当初の目的は当然“建築”を観ることであったが、最初の三カ月ほど、建築、建築という固定した視点でかたくなって観て歩いた頃、ようやく、これはいけないのではないか、視野を固定するとその中に入ってきたものだけしか摂取することができないのではないか、もっと心を開いて自由にしておいた方が、自然に入って来るものを受けとめられるのではないか、ということに気がついた。そうしてみるとやっと、“建築”の背後にあるヨーロッパという精神風土や生活が、また建築をその中に位置づけているより大きな物的環境の文脈というものが経験できるようになってきた。

たとえばイタリアの都市の広場を歩き、自分の靴音はその石畳にこだまするのを聞きながら感じたことは、ここには何かがある、この空間のたたずまい、この生活のあり方、広場の中やそれに面した店にゆったりと、しかしかまびすしく話し合う人々の様子、教会の鐘の音、誇りをこめて造られた大理石の装飾の数々(図一1)。これらは私がそれまで体験しなかった何物かであり、私が求めていかなければならない何物かを暗示しているよ

目次

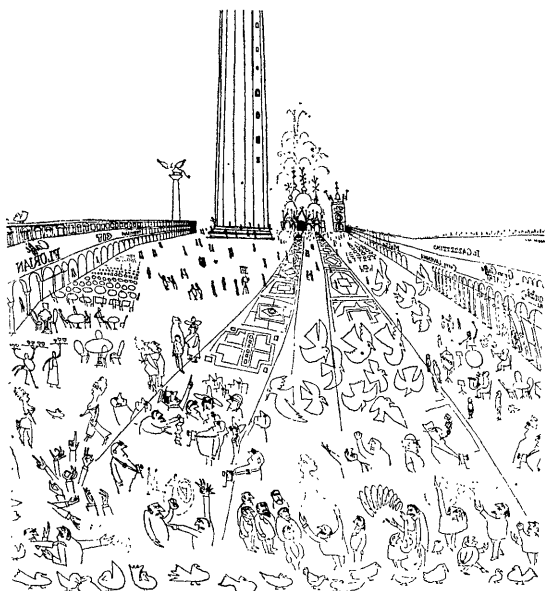
1——アーバンデザインと市民社会

- (1) ある個人的体験
- (2) アーバンデザインと市民社会
- (3) アーバンデザインの条件

2——海外のアーバンデザイン

- (1) 工業先進国の経験した問題
- (2) 戦後ヨーロッパのアーバンデザイン
- (3) 戦後アメリカのアーバンデザイン
- (4) 発展途上国のアーバンデザイン
- (5) これからのアーバンデザインの展望

図一 イタリアの太陽（部分）Steinberg
 “The Hert of the City” 1954 ROGERS, Sert
 Tyruhitt Hoeply Editore, Mirano 1954

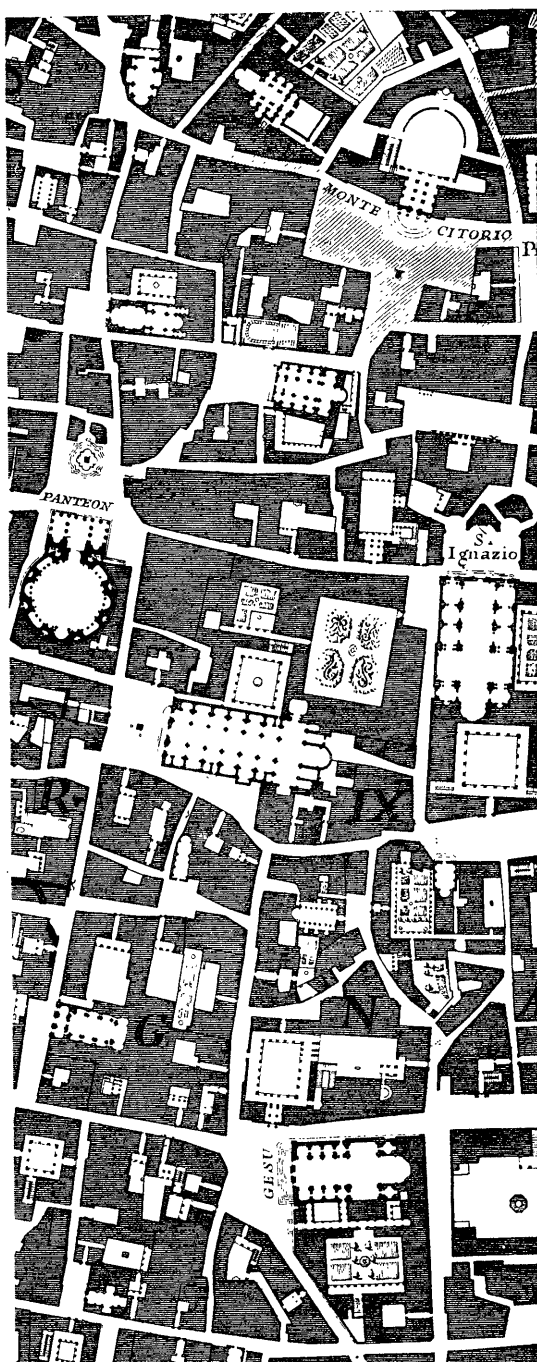


うにおもわれた。広場の空間を造っているもの、それは単体の建物ではなかった。いくつかの建物が、それら自身とそれらが造りだす外部空間を含めて造りだしているもの、それが広場の空間であり、その空間を生けるものとしているのはそれらの建物の使われ方、広場の外部空間のつかわれ方、いってみれば生活のありようの総体なのであった。これは物的な環境と人間生活、アクティビティー双方の活発なかわりあい、フィードバックの状態なのである。どちらか一方が欠けても、広場という場は成立しない。広場はいわばもっとも濃密な都市状態の存在する場なのであった。

このようなイタリアの広場を経験することによって、私の興味は単体の建築そのものだけではなく、建築物相互のかかわりあい、建築と外空間とのかかわりあい、また建築と外空間との間に介在する中間領域、またそれらの空間を媒介した生活のあり方に集中されることになった。さらに私の興味をそそったのは、どうして広場とか、色々の種類の公共的なスペース、準公共的なスペースが

図二 1748年 ジョバンニー

パティスタ・ノリによるローマ中心部の図。白い部分は公共的に使用される空間のネットワークを示している。



ヨーロッパ社会の中で生まれてきたのかという問題であった。これは一つには旅行者という生活の立場にも大いに影響があったのであろう。つまり旅行者というのは、その土地に、私のねぐらをも

たない。いきおい彼の生活行動は広場、道、公共建物などの公共空間に限定されてくる(図-2)。しかしここで大事なことは、このような公共空間が旅行者を拒絶せず、むしろ擁抱してくれ、市民の生活の一部を体験させてくれることなのである。また一方からいえば、市民の生活の重要な部分がこれらの公共空間の中で行われ、そこへたまたま入り込んで来た異分子もそのパターンの中に同化されうることなのである。公共空間はだれのものでもないと考えた社会と、公共空間はだれのものでもあり、とくに私のものであると感じ行動する社会の違いはいったいどこからくるのだろうか。

(2) アンバーデザインと市民社会

私はすでに市民という言葉を用意につかってしまった。しかし市民という言葉は我々のものであったろうか、これは明治以後英語の CITIZEN とかドイツ語の BÜLGER とかいう外国語に、我々の先達が苦心してつけた訳語なのであって、それまで我が国には存在しなかったもの、その概念すら多分、安土桃山時代に入る前の堺の商人団をのぞいて理解できないものであったにちがいない。“都市の空気は自由を生む”という中世末期の合言葉はそれまでにヨーロッパ文明の築き上げて来たものについてある重みをもっている。多数の奴隷の上に築かれていたギリシア・ローマ時代の市民社会から(図-3)(図-4)、基本的人間の平等性と自由をこれらの特権的市民や北方の蕃族の中にうえつけ育てたキリスト教社会、その教会の暗黒面を内側から崩してできたルネッサンスの市民社会(図-5)、これらヨーロッパ社会の獲得した普遍的な価値あるものを私は、理想化して観るようになった。若者の特権はよきものを発見しこれを理想につなぐことであるから、私は当時の私をそのまま肯定する。もちろん現実はそのほど

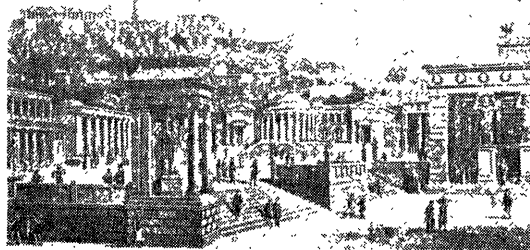


図-3 アテネのアゴラ



図-4 ローマのフォーラム

“A History of Architecture” Sir B Fletcher, Batsford 1896 (図-3 も同じ)

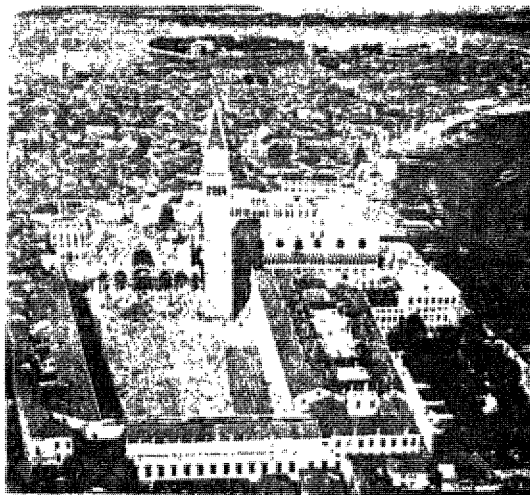


図-5 ヴェニスサンマルコ広場

“The Heart of the City” (図-1 と同じ)

単純ではない。我々の理想化するギリシアの黄金時代が、理想化された分だけその裏返しの暗い面をもっていたことを私達は知っている。キリスト教会についても、ルネッサンス社会にしても同様

である。近代及び現代の輝かしい科学技術、経済力の発展の裏には未曾有の規模での弱者に対する不正と植民化戦争による殺りくがあることもまた同様である。しかしこれらの歴史を通じて人類が何も得なかったとはいいい難い。これは人類の歴史に対して公正を欠くことでもある。たとえば、市民という言葉とその内容に与えられた理想が生まれたこと、これは人間社会の一つの進歩ではなからうか。これだけ、つまり市民社会への指向性への端緒は残念ながらヨーロッパが世界に先んじたこと誇り得る一つの成果であろう。

我が国の建築・都市計画の分野でも、1960年代初頭から“市民”という言葉が散見されるようになった。多くの市庁舎が“市民のために”という枕言葉つきで設計され造られていった。ただ不幸にも上から定義された市民は存在したが、人々が自から定義した市民は多くの場合存在しなかったのである。建築家や計画家は実在しないものを対象に物を造っていたし、現在でもおそらく多くの場合がそうであろう。市民というのは横浜市なら横浜市という行政的空間単位に、夜間人口として定住し、登録されることによって定義されるものではないことは明らかである。ある実感を伴った普遍的人間性への指向をもった心の状態、社会生活に対するあるかかわり方の姿勢と実行のうらづけをもった人々、それが市民なのであろう。

一つのいい方をすれば、このような市民のないところに市民社会はなく、市民社会のないところに市民的都市環境は本当の意味で造られない。アーバンデザインという用語は、シヴィック・デザイン(CIVIC DESIGN)という用語で代替されることがある。すなわち、アーバンデザインとは市民のための物的環境の造られ方をいうわけである。

現代のアーバンデザインの役割をシニカルに表現すれば、実のところ市民社会は死にかけているので、それに外種的な整形外科手術、それも美容

整形をすることによって若返えらそうという努力（これはとくにアメリカとかヨーロッパの例）、もしくは存在しない実体に服飾デザイナーが造る美服（我が国とか他の市民社会の存在をかつて経験しなかった地域）ともいうことができよう。

しかしそういってしまっては実も蓋もない。我々にはたんにシニカルであるにとどまるぜいたくは許されていない。市民という概念は横浜をはじめとして我が国でも徐々に育ってきているし、そのような実体を鼓舞するようなアーバンデザインの例も輩出している。

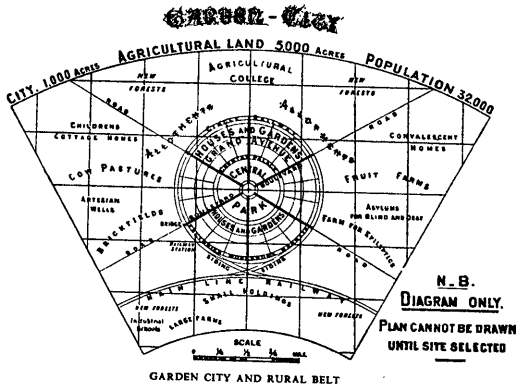
(3) アーバンデザインの条件

仮説として、もし物的環境と、生活パターンないしはアクティビティーとの間に、ある種の相互依存関係、フィードバックの関係があるとすれば、その一方を操作することができればもう一方も間接的に操作(Manipulate)することができることになる。もしそうだとすれば、物的環境の設計、操作を通じて好ましい生活パターンを間接的に刺戟したり暗示したりすることは不可能ではない。すなわち、ある都市状態の場をイメージ設定することによってそれに対して最もふさわしい(Conductive)な物的環境を設計することは可能である。ただしそれが目標水準に達しうるかどうかは純粋に技術的問題としてはまず第1に、いかにして当該の都市状態の場を豊かに具体的にイメージしうるかという条件と、第2にそのイメージ条件に対して効果的デザインを与えうるかということ、さらに第3にはこのデザインを実現する行政的、法的、財政的、仕組をつくりうるかにかかわってくる。

そのような意味で、狭義のアーバンデザイナーは、第2の条件に回答しうる設計技術をもったプロフェッショナル(職業人)だが、第1と第3の条件をつくっていくのはアーバンデザイナーだけ

ではなく、市民そのもの、政治家、行政官をはじめとする官僚や、これらの条件にかかわるいっさいの専門家を含むといつてよいであろう。

そこでいま述べたアーバンデザインにかかわる三つの条件を背景として、海外のアーバンデザインという与えられたテーマに限られた紙数で表面的になるのをおそれず触れてみよう。



図一六 田園都市のダイアグラム

“Garden City of Tomorrow” Abeneser Haward Faber 1944編



図一七 ニューヨーク マンハッタンのロックフェラセンター

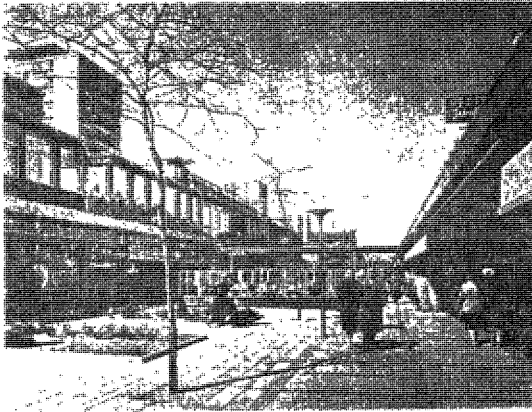
“The Hert of City” Rogers Sert Tyrubitt Hoeply Edtiore, Mirano 1954

このテーマに入る前に一つ問題がある。わたしたちが海外の……というとき、それはえてしているわゆる欧米工業先進国の……を無言の前提としている場合が多い。もちろんこの地域の提供してくれるインフォメーションはほう大なものがある。またいいにくいことであるが、われわれのもつコンプレックスからいうと、欧米では……という枕言葉がつくとミソもクソも一諸にして進んだもの、優れたものとして無条件に肯定したり許容したりする傾向が未だにある。とくに何かしらもっともらしい説明があるが、そのための適確な証明方法が手元に見当たらないときに好都合につかわれ、物事をバイパスする呪文としてこの枕言葉がつかわれやすい。

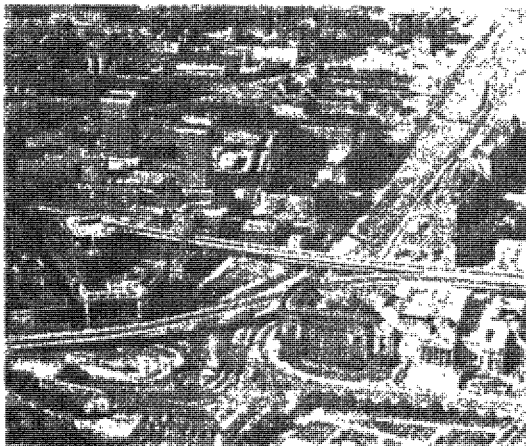
いったい、わたしたちが工業先進国のアーバンデザインから学びうるものは何であろうか。いわゆる発展途上国でのアーバンデザインはどのような問題をかかえていて、これらはわたしたちとどんな関係をもっているのであろうか。

(1) 工業先進国の経験した問題

工業先進国は過去1～2世紀の間に産業革命を経て著しい経済成長をとげた。その結果、たとえば世界の工場といわれた英国の19世紀の都市環境は無秩序かつ急速な工業化のために、貧困、不潔、公害などあらゆる都市悪を経験し、大規模な環境の非人間化が大都市で進行したのである。この状態に対して組織的な反省や試行が軌道にのったのは、20世紀に入ってからのことであった。現在の、イギリスのニュータウンの原型となった田園都市（図一六）の理想像もこの反応の産物である。このような環境の大規模な非人間化（di-humanization）は、現在多くの国々で巨帯都市（メガロポリス）の出現となって、人々の半ば以上を呑み込



図一八 ロッテルダムのリーンバーン買物通り
 “Face of the Metropolis” Martin Heyerson
 Rondon House, New York 1963



図一九 リバプール市中心部周辺の再開発
 “Liverpool City Center Rlan Preview”
 Liverpool City Planning Department 1970

んでいる状態なのである。コンクリート・ジャングルと機械の支配する都心部，無限に広がる郊外地，海岸線を埋め尽す工業地，自然を破壊しながら自然を求める矛盾を余すところなくみせるレクリエーション開発，この状況の下で少しでも人間的な環境の種を播こうとしているのがアーバンデザインの努力なのかも知れない。逆説的にいえばそれまでの環境の非人間化の経験の多かった地域ほど，切実に環境の人間化が欲求され，おとろえた市民社会の伝統が発掘され頼りにされてきているのだといえよう。ニューヨークのマンハッタン真中に1930年代に完成されたロックフェラーセ

ンター（図一七）は，まさにコンクリートジャングルと資本主義論理の要求する空間の経済効率に対する新しい解釈であるし，戦前・戦後を通じてC I A Mを頂点とする建築家，都市計画家の主張しつづけてきたのも，ひとえに環境の人間化の問題だったのである。

(2) 戦後ヨーロッパのアーバンデザイン

第二次大戦後のヨーロッパではC I A Mの理論と新しい戦後の現実の要求をふまえて幾多の重要な都市再開発が戦災復興の作業として実行に移されていった。

リーン・バーン ナチスドイツによって完全に破壊されたオランダのロッテルダムに生まれた大規模な歩行者専用の買物通りリーン・バーン（図一八）は，その古典的な一例である。

イギリスのニュータウン イギリスでは田園都市の経験をフルに活かしていくつものニュータウンが建設された。これは新都市公社によって，計画，設計，建設，管理運営を一貫して行う責任体制の明確な仕組をとることによって，大きな成功をおさめている。ヨーロッパにみられる仕組の確かさというのは経験の積み重ねを重んじる伝統の一つの成果として評価してよいのではないだろうか。わが国で多くの計画要素を含む大規模なプロジェクトが何となく本格的になされないのはタテ社会の必然といってしまうまでもだが，タテ割りのシステムを勇敢に目的的に変革する努力が今一つ足りないのではないかという気がする。

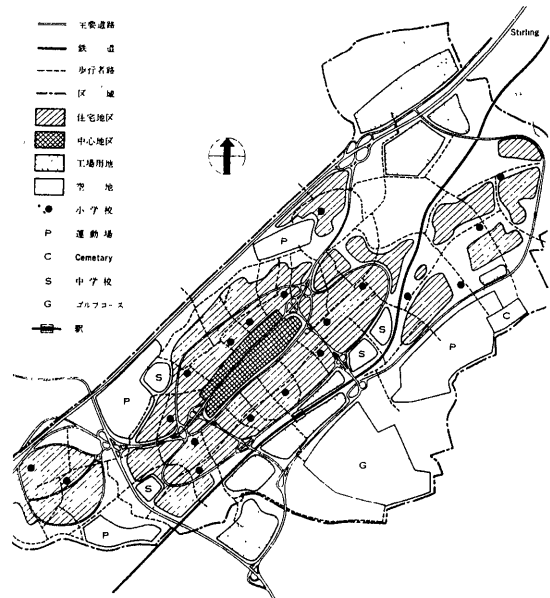
シティー周辺部の再開発 拙速をきらうのもイギリス的気質というのか，戦後12年も経った1957年筆者がロンドン滞在中見聞したことの一つに，シティー（東京の丸の内地区に当る）に隣接する広大な被爆地の計画がある。この地区をシティー機能の拡大用地とするか，あるいは都心部への業務機能の集中を限定してかつ職住近接を計るために

住宅地とするか、戦後10年間は議論と代替案の検討に費され、ついその2年前から後者に決定して着々と高密住宅地の建設が進みつつあった。わが国ではまったくの時間の浪費と考えられることを悠々とやっていることに関して、強い印象を受けたのであった。都市の物的環境を基本的にストックとして考え、それ故に慎重に事を運ぶのはやはり一つの見識であろう。

リバプールの再開発 一方、イギリス中部のリバプール市はビートルズの生まれた都市として名高いが、長い歴史をもつ港湾機能のお株をロンドンに奪われ斜陽をかこっている都市でもある。リバプール大学はまた世界で最も早くシビック・デザイン科が開設された大学としても有名である。1970年筆者が招請講師として大学滞在中、リバプール市は都心部の機能回復によって市の起死回生を計ろうと大規模な都心部再開発計画を進めていた。その結果、たしかに都心部そのものは新しい活気を注入されたことがうかがえたが、問題はその周辺部である（図一9）。大規模な取り壊しのち、新しい建物が建ち、機能しだす間の2、3年というものは、そこは死に絶えた場であり、隣接する地区も客は遠のき、借家人は逃げ出し、家主は持ち耐えられずに低収入層にテナントを求める、といった具合に傷跡は拡散していく。これは都心部ないしはその周辺で行われる大規模再開発につきもののパターンのものである。やはりこのような地区は恒久的な構造体をもつ建物を修復してやる方法のほうが経済的でもあり、場の時間的維持にとって、いいかえれば社会的、心理的な効果にとっても有効なのではないかと思った。大学の教授連もこの点を強く批判しているようであった。彼等によればアメリカ的やり方を直輸入した行政体やコンサルタントのアーバンデザイナーが悪いのだそうである。たしかにヨーロッパでは珍しいケースであった。

図一10 カンバーノールドニュータウン

「建築設計資料集成5」日本建設学会編



アーバンデザインの目標設定 アーバンデザインを語るときにイギリスのニュータウンを省くことは出来ない。田園と都市の二つを結合止揚するというハワードの夢は1898年に出版された“明日の田園都市”に始まり、現在20に余るニュータウンの中に実施された実験としてつづけられている。ハワードが巻頭において、幻想家、詩人、画家であったW・ブレイクの詩の一節

“イングランドの緑の快ろよき野に

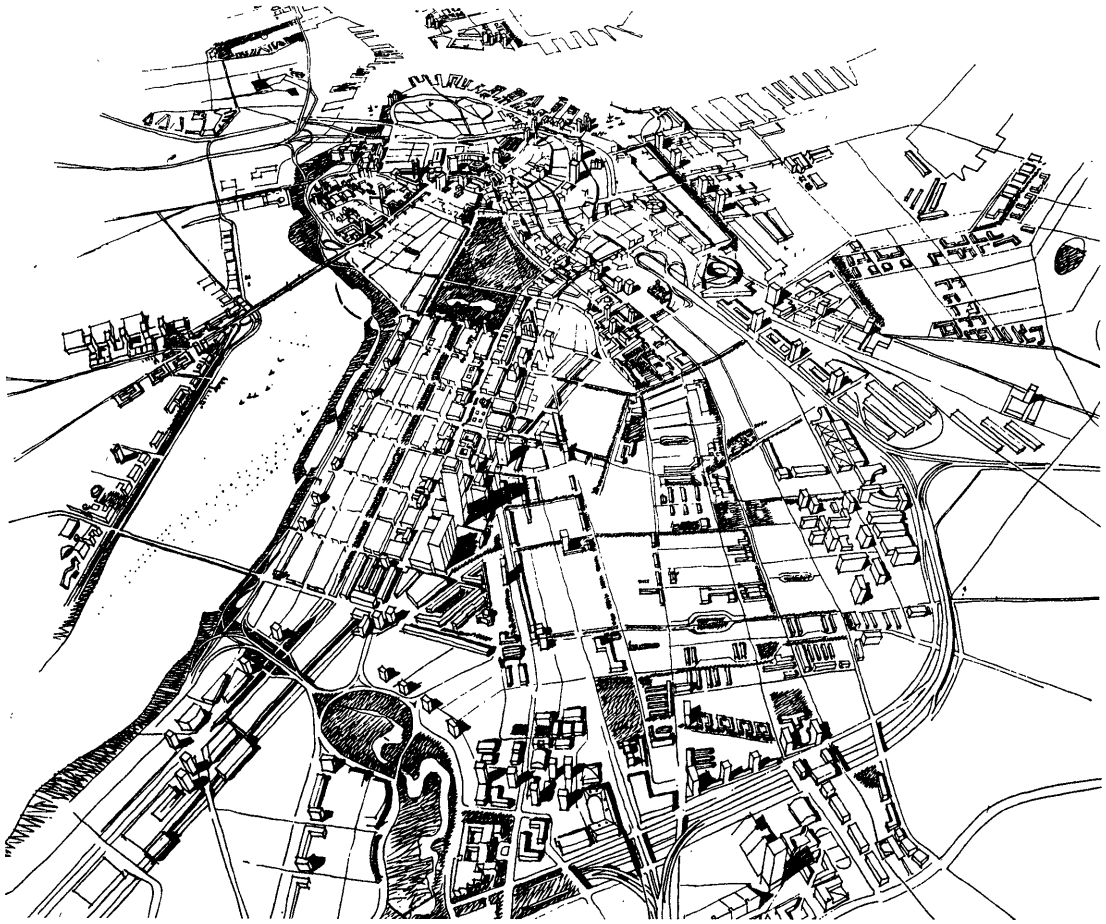
イェルサレム^{*}を建つるまで

わが精神の戦いは止まず

わが剣もわが手の中に眠ることあらじ”

をかかげたのをみても、イギリスのニュータウンの根は理想の生活像を求める姿勢にあったことがうかがえる。戦後大ロンドン計画の中に田園都市——ニュータウンが地域計画的に位置づけられたが、いちばん興味深い事実はこのような大スケールのプランニング構想のはじまりが詩にあったと

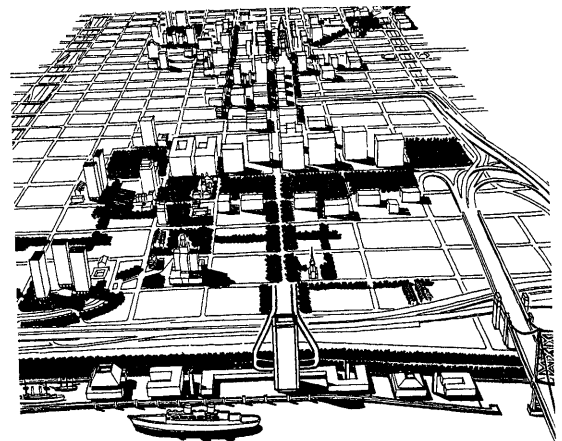
*イェルサレムは聖書の黙示録の中で神の国ないしは楽園を象徴して使用されている。



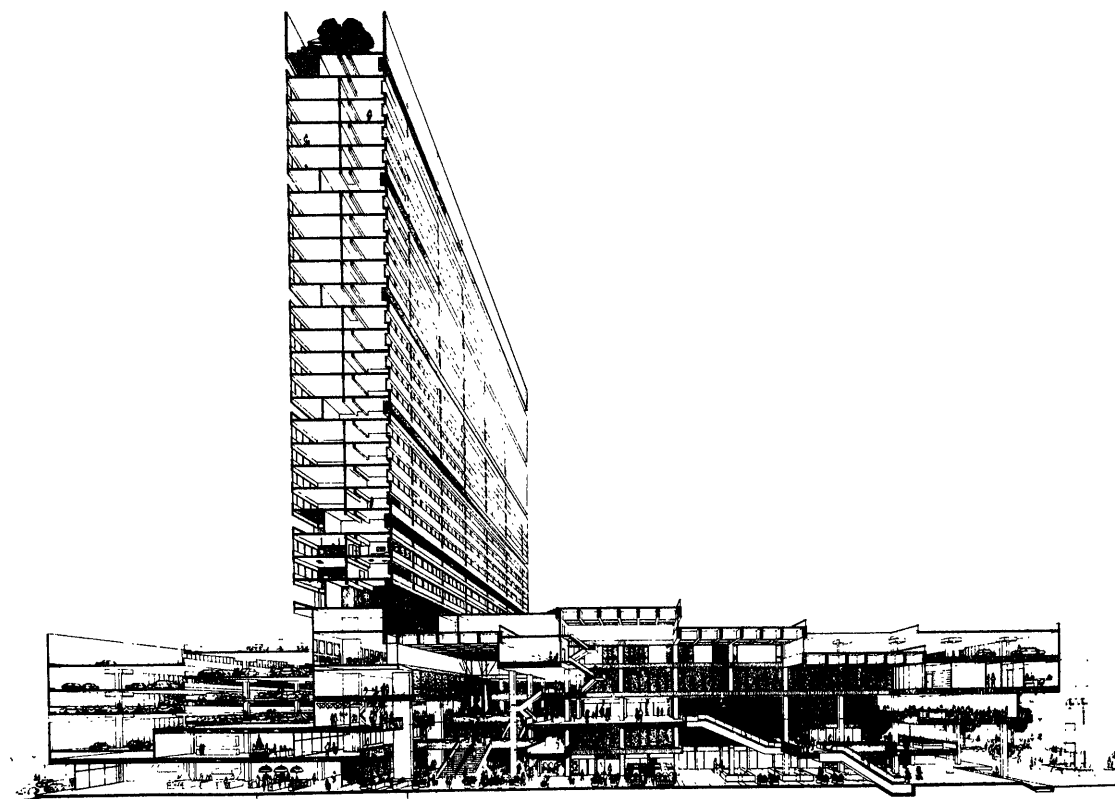
いう事ではないだろうか。プランニングやデザインがたんなる数字や図型の操作に終わってしまうとしたら、人間の住環境は荒涼たるものになってしまうだろう。本質的には達成すべき目標そのものを模索するプロセスは、目標を安易に定めてそれを達成する方法を模索するよりむづかしい。

問題のレベルは多少異なるが、イギリスにおける戦後第一世代のニュータウンが近隣住区方式を採っていたのに対し、都市性の創出に対する反省から、第二世代のカンバーノールド・ニュータウン（図一10）で単一センター方式を採用する実験を行なったことは、ある意味でニュータウンの生活像のあり方に対する目標の模索の一例といえよう。横浜市の金沢地先住宅地の設計人口容量は、奇しくもハウードの田園都市の3万人と一致する

図一12 フィラデルフィア中心部の再開発計画
“Design of City” E. A. Bacon 1967



が、わたしたちがここで実現を期待しているのは、近隣住区方式でも単一センター方式でもない、ある意味で日本的なまちなみであるが、これを達成する方法とかプロセスの上で、既成の行



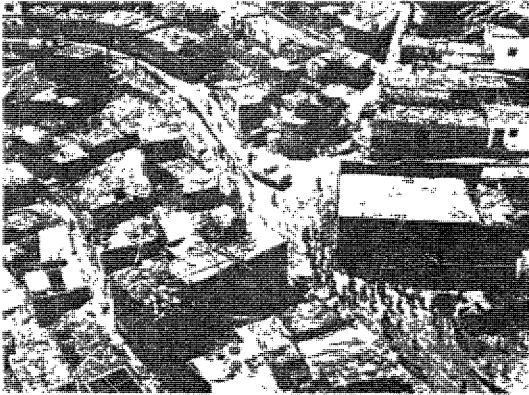
財政システムがこれをいかにバック・アップする体制をとりうるかどうか、成否のかぎを握っているように思われる。

(3) 戦後アメリカのアーバンデザイン

戦後のアメリカのアーバンデザインは、理論的には戦前戦中にヨーロッパから流出した人材に主導された傾向が強い。アメリカでは戦災復興よりも経済成長とそれに伴う人口の都市集中、都市機能の刷新、人種問題をはじめとする社会問題などが対象であり、既成都市の大規模再開発の必要が建築、都市計画、造景の中間領域としてのアーバンデザインの必要を生んだといえよう。1950年初頭にはすでに従来の単体建築の方法論や、平面的ゾーニングの組合せだけでは、都心部の新しい人工環境の造出には満足のゆく結果が得られないことが認識され、新しいスケールとイメージをもったアーバンデザインが待望される状況が熟してい

た。1960年代にはアメリカの都市の都心部の再開発には、フィジカル・デザインの実施例としては、幾多のみるべき実例が出現している。ボストンの政庁センター（図-11）、フィラデルフィア都心部等はその一例である（図-12）。ただしその反面、大規模な住居環境、とくに住所所得層の住居地域の再開発は社会的にみて成功した例はほとんどないといってよいといわれている。なかんずく都心部の黒人地区の再開発プロジェクトでは、貧しい黒人の住宅が取り壊され、住民はより状態の悪いスラム地区に追いやられ、それに取って替って中流白人の住居地区が生れるという社会的不正を招来する例が多い事が明らかとなり、ようやく都市再開発の物理的の外面だけでなく、その内容が問われるようになってきた。このアメリカ方式の再開発を殆んどそのまま採り入れた発展途上国としてシンガポールがある。この場合、都市機能の更新、経済面における近代的セクターの改

図一四 南米のスラム “Urban Dwellingment”
J. Turner MIT Press 1969



善には目を見張るような効果を発揮し、都市国家シンガポールの面目を一新した観があるが、反面いわゆるバザール・セクターともよぶべき後進的経済部門、たとえば伝統的なチャイナ・タウンの小売業に依存する住民には、壊滅的打撃を与えたことが問題とされている。その中ではチャイナ・タウンに隣接したピープルズ・パークのショッピング・センターは、巨大な多層の吹抜屋内空間を用意することによって、熱帯地方の気候条件をうまく克服し、かつ、チャイナ・タウンのアクティビティーをそのまま生かし継続させた成功例である（図一三）。

(4) 発展途上国のアーバンデザイン

発展途上国におけるアーバンデザインの問題は、二つの側面をもっているように思われる。その一つは、多くの発展途上国が新興国家であることにも関係して、都市のシンボル造りが盛んであることである。多くの場合このシンボル造りはその国の民衆の精神を高揚する目的と指導者層の自負を表現する手段を兼ねている。したがって現代的、あるいはウルトラ・モダンな表現で、その時点での建設技術の先端を意識したものが多く採用される傾向にある。行政の建物、モニュメント、高層ビル、国際級ホテル、スポーツセンターなどがその例としてあげられる。このような欲求

は必ずしもたんなるミエとして片づけられないものがあることも認めなければならない。我が国での一時期の市庁舎ブーム、オリンピック施設、万博、海洋博、高層ビルラッシュなどをみても、たんに経済論理だけでないミエがはたらいしていないと誰がいえようか。

もう一つの側面は、発展途上国における急激な都市化とそれによってひき起されるスラムや不法占拠者集落（スクオッター）などの、都市の住環境の悪化である（図一四）。この状況は工業先進国における都市問題とは多少様相を異にしている。端的に言えば、工業先進国の問題は経済成長に伴う人口の集中、経済成長そのもの、工業発達そのものがもたらす環境の非人間化である。一方発展途上国のそれは人口の自然増の激化、欧米ないしは日本型の工業化目標の外部からの押し付け、ないしは無条件の受入れによる中間技術による工業部門や農業部門の軽視、農村開発の立遅れ等による農村人口の大規模な都市への流入である。すなわち都市でも農村でも就業機会が人口増に追いつけぬために、多数の失業者や潜在的失業者の存在、これらの人々によるスラム地区や不法占拠地区の拡大と、極端に劣悪な居住条件の問題である。ちなみに我が国の人口増加は年率約1%なのに較べて、発展途上国のそれは3%を超え、都市部だけをとれば4%以上というもまれではない。またこれらの国は熱帯、亜熱帯に位置しているものが多いので、飲料水の供給、汚物・廃棄物処理システムなどの基本的インフラストラクチャーが需要に追いつけない場合は、まさに人間以下の生活環境に住むことを余儀なくされることになる。このようにみえてくると、発展途上国の都市問題というのは、近い将来いかにして非都市的な産業セクターを開発して既成都市への人口集中を抑制するか、それでもなお都市に集中する人口に対していかに人間としての最低限の生活環境を提供しうる

かということにつきよう。この際明らかなことは、発展途上国の経済力の限界の中では、工業先進国と同じパターンや発想では住宅、公共施設の供給は不可能だということである。このような状況をふまえれば、発展途上国においては“省資源型の都市化”という問題設定と、具体的な方法の開発が焦眉の急となっていることは疑いない。したがってこのレベルでのアーバンデザインは今までとまったく違った前提と発想に発案を求めなければならぬことも明らかである。

5) これからのアーバンデザインの展望

以上のような都市化の問題は、資源の有限性という視点で長期的にみれば、発展途上国のみに限られた問題ではなく、基本的には工業先進国、とくに資源の少ないわが国にとって切実なものである。わが国の都市問題を展望してみると、たとえばゼロ成長やマイナス成長の下では、新たな大規模開発や再開発等の事業に依存した解決は次第にむつかしくなってくるのが十分に予想される。この場合、産業活動の低下もしくは停滞という状況が考えられるので、大気や水の汚染等の外的な環境阻害要因の通減は期待できるとしても、住環境そのものの質の改良はどうしたら可能となるのであろうか。結論的にいえば、住環境をフローとして把握するのでなく、ストックとして把握し、既成のストックを生かしながら(図-15、図-16)漸進的なきめの細かい改良を加えていく方向が一つ考えられる。アーバンデザインの方法としても経済力にものをいわせ、物にたよりきった短絡した方法ではなく、手間、ヒマをかけた地味な方法を開発し、それを実施する仕組をつくっていくことが重要となってこよう。いいかえればハードなアーバンデザインから、よりソフトなアーバンデザインへの指向が出てくると考えられるのである。

図-15 ポネアリスのニコレット・モール

既存の公道を利用した地区環境の改良の例

“The Future of the City” Peter Wolf
Watson-Guptill Publication 1974

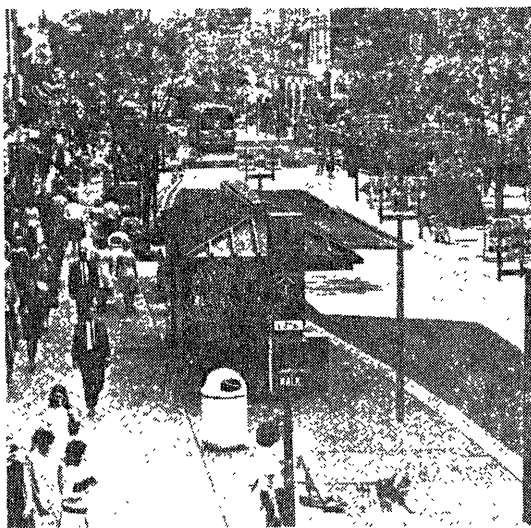


図-16 サンフランシスコのジラルデン・スクウェア

古い工場を修復して造られた店舗、飲食店、広場等の商業的にも成功した修復の古典的な例(出典は図-15と同じ)

